

連載

稲村公望氏が2004年10月出版された「ふるさとには心も姿も美しく未来の邦を今生きる」(郵研社03-3584-0878)の中から一部抜粋して、連載しています。

ふるさと島の島を旅して

最終回

名瀬に行ったのは、小学生の初旅だったように思う。午前中に亀徳(徳之島)の港で伝馬船から本船に乗り、夕刻に立神を過ぎる。まだ岸壁がなく、舢(はしけ)が伝馬船と比べて巨大でやはり奄美の都会の名瀬は違々と子供心に感じたものだ。叔母が、公務員の宿泊所で働いていたので、水洗の便所があり、紐を引くとゴトと音を立て、しかも水が暫く停まらないので、便所を壊してしまったと謝ったのも名瀬だった。高千穂丸、照国丸、甲南丸と乗ったが、初代のあけぼの丸は腰の低い対候性のある船だったらしく、船室で寝るよりも甲板にゴザを敷いて寝て、波を被るようになるのと操舵室の脇に入れて貰った。

田から直通便で二時間、上り口説以来の船旅の長さは何だっただろうというあつけなさで笠利の空港に降り立った。喜界と奄美本島との海峡は、梅雨の晴れ間で波頭が白く立っていたが、もう南の風で、田中一村記念の美術館も日射しは強かった。沖縄もそうだが、琉球の島々ではどちらかというと西日を向いている方に集落が多く、黒潮の影響か、光が彩かになる。一村の絵も、西日を向いた入江の景色が多い。夕方は、屋仁川と書いてヤングーだった、子供は行ってはいけなかった場所の辺りで、島の料理と称する物を食べた。豚の肝臓を味噌漬けにしたものは、島口で大阪に出稼ぎに出た少女が肝を標準語で何と呼ぶかわからず肉屋で、考え抜いた上、豚の心を下さいと言ったとの笑いを思い出させたし、色どりのある魚は、

糸満の魚売りのおばさん達が、ユーコンソラミーとウチナー口でたらいを頭の上に載せて、片天秤を手にして家々を回りガジュマルの木の下で雨宿りする光景を思い出した。飽食は無かった時代だ。

翌日は、一行と別れて、婆さんが代用教員をしていた大和村にバスで出かけた。傘を差して、カバンを下げての風姿であるから、笹森儀助の出で立ちの雰囲気だったが、どんな浜にも、立派な護岸の漁港があり、木麻黄の林は刈りとられて、枝付舟もサバニも少なく、ヤンマーとかヤマハとかのFRP船が何隻か朽ちている光景であった。村の集落を貫通する表通りから一本離れた裏通りにはまだ共同売店があり、爺さん婆さんが孫のおもりをするところもあったが、もう屹度、豊年の祭りをする、スピーカーを鳴らし、太鼓を乱打して、三味線の合奏がある浜下りの光景は消えてしまったのではないかと思う。

稲村公望氏略歴

昭和22年徳之島の郵便局の宿直室で生まれる。
郵政省の情報通信政策、国際協力部門を中心に、福岡、パノク、名古屋、沖縄等で勤務。
平成17年3月退任。現在、中央大学客員教授。

しかし、思う。茫然と自失してはならない。天然の黒潮に守られ、温暖の美麗の島で、技術革新を求め、少しでも資本の蓄積を追及して、知識が代替して労働の投入をすれば、経済的には成長できる。道路や港のインフラは、もう昔の奄美ではない。イキュンニヤカナ節のように、あなたは行ってしまふのかと嘆く必要もない。たった二時間でふるさとに戻り、またたった二時間で大東京の雑踏に戻れる美しい島をふるさとに持つ誇りの旅でもあった。

新入会員紹介
徳之島出身のシンガーソングライター
あずままどか 東京で活躍!

8月10日鹿児島県徳之島生まれ20才のときに作曲を始め、2才でギターを持つ。23才でソロ活動開始。直後に河村隆一氏の全国ツアーにオーピングアクトとして抜擢され注目を浴びる。その後NHKみんなのうたや、ラジオのエンディングソングにも楽曲が使われ、他アーティストへの歌詞提供や、舞台への楽曲提供なども手がける。CDリリースもコンスタントに行い、ミニアルバム「ありがとう」は手売りで2500枚以上に及ぶ。今年4月、自身の徳之島への想いを綴った楽曲を入れたCDを発売。ライブ活動も積極的に行い、2005年には自身のワンマンライブも大成功に収め、日々パワーアップしてゆく歌声は必聴!!

H P <http://sound.jp/marka/>
メール azumamadoka@yahoo.co.jp

次回ライブ
5/13(土) YEBISU 8 SWITCH
「奄美産ミラクルナイト」
OPEN 18:30 START 19:00
チケット ¥2000 (前売り)
¥2000 (当日)
5/23(火) 表参道 FAB
「Peel a orange cut.38」
OPEN 18:30 START 19:00
チケット ¥2300 (前売り)
¥2800 (当日)



ニューアルバム